

# CT、MRIが飛躍的進歩

やまなし

## 医療最前線

県立中央病院から

《 75 》

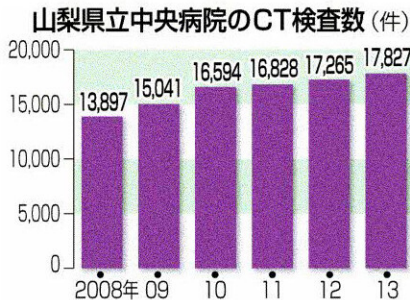
コンピュータ断層撮影装置(CT)や磁気共鳴画像装置(MRI)など画像診断装置の技術がここ数十年で飛躍的に進歩している。より詳細に病気を診断できるようになり、特にCTの撮影件数は右肩上がりが増加。一方、撮影された画像を見て診断する放射線診断医の不足と負担増が課題となっている。

県立中央病院放射線診断科副科長の中島寛人医師によると、CTは現在、十数秒で1ミ以下の薄い輪切りの全身画像を撮ることができ、画像診



中島 寛人  
放射線診断科  
副科長

## 詳細な診断で検査数増加



断の主力となっている。同病院でも各科の医師から放射線診断科へのCT撮影依頼が増加。2003年に1万1271件だったCT検査数は13年には1万7827件と増加の一途をたどっている。

CTの有用性について中島医師は「脳動脈瘤や腹部疾患の手術前に必要だったカテテル検査が、患者さんの負担が少ないCTで代替できるようになった」と説明。さらに交通事故などによる全身外傷では長時間を要するレント

ゲン撮影が必要だったが、5分程度のCT検査で省略できるようになったという。

CT検査数の増加により、画像は患者1人平均で数百枚に上り、診断医1人につき1日に数万枚の画像をモニターで診断しなければならぬのが現状だ。日本放射線科専門医会が調査した日本の放射線科医師数は、100万人当たり36人と諸外国で最低だったのに対し、人口当たりのCT、MRIの台数は世界1位だった。

近年、コンピュータの助けを借りて画像診断を行うコンピュータ支援診断(CAD)の研究が進み、診断医の負担を減らす取り組みも始まっている。しかし、病気の質を見極めるにはやはり診断医の目が必要で、過重業務の問題解決には時間がかかりそう。中島医師は「大量の画像を必死に読影する日々。重大な病気を見逃すことがないよう努めたい」と話している。

第2、4木曜日に掲載します